

子育て支援などに重点 新年度鈴鹿市予算案、発表される

3月議会に提案される鈴鹿市の平成17年度予算案が23日発表されました。小泉内閣が進める「三位一体改革」という名の地方への負担押し付け、財政支出削減のもとで、地方自治体はどこもきびしい予算編成を強いられています。鈴鹿市も同様です。

そんな中でも、新年度予算では「子育て支援」の施策として、昨年設置されて好評の「子育て支援センター」、育児支援のための「ファミリーサポートセンター」事業、や、乳幼児を持つ親が集い交流する「つどいの広場」事業、あらたに2ヶ所の民間保育園設置、などを積極的に進めようとしています。しかし一方では、昨年に強行された公立保育所運営費への国庫補助カット（一般財源化）のあおりか、老朽化してきている保育所の建て替え計画はすすむ気配がありません。

防災対策すすむが、マンパワーは不足ぎみ

学校や公共施設などの耐震補強は計画的に進められ、避難先となる学校体育館の補強工事にとりかかっています。今年完成予定の新庁舎の屋上に、消防用高所監視カメラを設置するなど、ハード面での整備は進みますが、大事なマンパワーである消防職員の増員は、定数で3人の増にとどまっています。

財政的には、地方交付税制度の改悪によって鈴鹿市は16年から「不交付団体」にされてしまい、新年度でも財政調整基金・減債基金を31億円も取りくずして、収支バランスをとることになります。

市民にとっても、税制の改悪によって配偶者特別控除の廃止や市民税均等割非課税の廃止など、負担が増えることになりましたが、一方、国保税が平均5%引き下げられることで、昨年よりは少々楽になります。

給食センターの建て替え場所が決定

老朽化で建て替えが迫られていた飯野給食センターの、建て替え予定地がこのほど決定しました。場所は、牧田小学校の北側、田んぼの中にあったホンダの社宅跡など、約5千平米の土地です。

今の給食センターの能力4千食から5千食にふやし、旭が丘小の給食室廃止分をカバーします。H17年度に造成・設計、18年度に建設し、19年度には調理・配送を始める予定です。先にこわす旭が丘の1千食分を3つの学校から調達する、変則「親子方式」は、2年で終わることになります。

さる12月議会で、私たちは「センター建て替えを先に行なうべきを、逆立ちした方法によって年1千5百万円のムダな出費になる」と批判しましたが、用地買収を2年前に済ましていれば必要なかった費用です。なぜこうなったのか、きちんと反省することが求められます。

あと19小学校も、全部センター化するのか？

今度のセンターで調理・配送するのは11小学校分です。市の計画では、残る19校も自校方式からセンターに変えるとしていますが、まだ十分に検討する時間があります。今年はじめの中学校「ランチサービス」のゆくえと合わせて、学校給食の意義についてしっかり議論をしたいと思います。

人間ドック、脳ドックの受診方法が改善されます

国民健康保険で行なう人間ドックと、脳ドックが、17年度に次のように改善されることになりました。

人間ドック 募集期間を延長し、4月の10日間ほどだったのを「4月5日～5月13日」とし、受診期間も5～6月を「6～7月」に変更します。申し込みを忘れているうちに締め切りになって、受けられない事態を防ぐためです。定員は1500人、自己負担金は8千円です。

脳ドック 毎年申し込みが多いので、定員を100人から150人に増やします。受診期間は8月～4月、自己負担金は8千円です。ただし、2年続けての受診はできません。

予防と早期発見・早期治療のための人間ドック事業は好評ですが、自己負担金が始めの頃の5千円からだんだん上がってきたことがネックです。

西部Cバスが「本格運行」に

平成12年3月から走り出した西部地域のコミュニティバス=Cバスが、5年間の「実証運行」期間を終えて、いよいよ「本格運行」に移行することになりました。この5年間のCバスの実績は次のとおりです。

利用者数	H12・201,151人、1便平均13.4人
	H15・245,041人、1便平均16.3人
運賃収入	H12・26,831千円、収支率 35.3%
	H15・29,745千円、収支率 43.4%

導入効果は、当初計画の条件をすべて達成

Cバスのスタートに当たって、「運行のねらい」が5つ定められました。高齢者、主婦など車を使えない、使いにくい人などの移動困難性を改善する。できるだけ車から公共交通への移行を促進し、自動車交通に偏らない交通体系をめざす。従来の路線バスのイメージを払拭し、利用したくなるような新しいバス交通システムにする。地域特性や地域住民のニーズを取り入れることや、地域の人々の参加や支援などにより、地域生活に欠くことのできない交通になることをめざす。評価・改善できる柔軟なシステム、また実現できることから段階的にグレードアップを図れるシステムにする。

5年間の実績は、このねらい、目標をすべて達成したことになり、今や西部地域になくてはならないバスとして住民に親しまれています。

「九条の会すすか」が発足講演会

憲法「改正」論が毎日のように報道される中、「平和憲法を守ろう」を旗印にした「九条の会」が、全国各地で結成され活動しています。鈴鹿市でも高校教師OBが発起人となって、「九条の会すすか」が発足し、設立総会を兼ねて講演会が開かれます。多くの市民の皆さんの参加をよびかけています。

とき 3月26日(土)AM9:30より

ところ 鈴鹿市文化会館

講演 森 英樹 氏(名大教授)

「短いお話、長い考え」

韓国のイ・ギュギョンという人の詩と絵の本「おなかがすいたらごはんたべるんだ」（ポプラ社）が、静かなブームである。訳者の黒田福美さんは、「タイトルを見ると、本当にあたりまえのことだ。だけど人間はそんなあたりまえのことが、いかに分かっていないのか、分かるまでにどれだけの回り道をしなければならないのか、と思うことがある。」「特に混沌とした現代には、このような『生きるための哲学』が、私たち大人の心にもしみいってくるものだと思う。」と述べている。

勇気と幸せ

勇気はマッチのようだ。 幸せは焚き火のようだ。

ある日 運命の嵐が吹きすさんで

幸せの焚き火が かき消されてしまっても

マッチさえあれば 再び火をおこせる

過ち

過ちには 持ち主がない。手にした人が 持ち主だ。

だから 人の過ちも 吹聴してまわっていると

自分の過ちになる。

二つの方法

自分の手が美しくないと 悩んでいる娘がいました。

ある日その娘は 医者を訪ねて言いました。「先生、私は自分の手がとってもみっともないと思うんです。何かいい方法はないですか？」

すると医者が言った。「二つ方法があります。あなたの手を取っちゃうか あなたの頭を取っちゃうか、ですね。」

その時から

窪みが穴になり始めるのは シャベルを握った時からで
塀が高くなり始めるのは 石を持ち上げた時からだ。

目的地が近づきだすのは 一步を踏み出した時からで
問題が解決しだすのは

それに着手した時からだ。

どの詩にもきれいな色のイラストが添えられていて、楽しい「哲学書」だ。